

宝くじ当たらないかなあ、と考えなくなったのはいつ頃からだろう。宝くじを買ったことなどなかった。それでも、もしも当たったら、あれを買おう、これがほしい、誰におすそわけしよう、などと考えるのは楽しかった。宝くじさえ当たれば、たいていのことはかなうと思っていた。買わなかったのは、きっと当たらないとわかっていたからだ。

今は、当たらないとまでは思わない。もしかしらば、当たる人生もあるのかもしれない、くらいには肯定的だ。買わないのは、単に、お金にそれほど夢を見なくなったからだと思う。

ほんとうにやりたいこと、ほんとうにほしいもの、ほんとうにかなえたいこと。私にとつてのそれらのことが、あまりお金とは関係がないと気づいてしまった。

今年の冬は、雪が多かった。私の住む福井では、実に三七年ぶりの豪雪となった。一月から二月にかけて、毎日雪が降り、市民は家に閉じ込められた。暖冬続きで、めっきり雪が降らなくなっていたから、まさかこれほど積もるとは予想もしていなかった。街にも、家にも、最低限の備えしかない。わが家には食料も燃料も二週間分くらいだったと思う。

雪は降り続き、やがて陸路も空路も線路も遮断された。郵便も、流通も止まり、店から食べものが消え、ガソリンスタンドにはガソリンも



絵・江口修平

大雪の街で

宮下奈都

灯油もなくなった。学校もすべて休校。わずかな望みを持って出た車が幹線道路で何百台も止まり、自衛隊が派遣されたものの、何日もそこで夜を明かすことになった人たちがいる。誰にどうすることもできなかった。

そう書いていて思ったのだけど、もしかして、ものすごいお金を積んだら、あの渋滞を解消することができたのだろうか。灯油を手に入れることはできたのだろうか。そうかもしれない。でも、雪の降りしきる中、ヘリコプターも家用ジェットも飛べたとは思えない。

雪に閉ざされた街で、少し歩くだけでも遭難しそうになりながら、道ですれ違う人と挨拶を交わしたり、雪かきをねぎらいあったりする。ささやかな一体感のようなものが生まれたのも事実だ。それでも、寒さに震え、食べものの心配をし、救急車さえも走れない恐怖と閉塞感で、空を見上げていたことは忘れられない。

お金でかなわないことがはつきりと目の前にあった。お金には、もう夢を見ることはできない。

雪が降り続く間、街が異様に静かだった。こんなにも不自由なときに、不謹慎ではないかと自問したけれど、あの静寂、あの美しさにだけは、うっとりしないわけにはいかなかった。この世の終わりに、きつとお金はどうすることもできないだろうと思った。

みやした・なつ●作家。2004年「静かな雨」で文学界新人賞佳作を受賞してデビュー。2016年『羊と鋼の森』で本屋大賞受賞。他の著書に『スコーレ No. 4』『太陽のバススタ、豆のスープ』『誰かが足りない』『神さまたちの遊ぶ庭』など。最新刊は食べることと生きることについてのエッセイ集『とりあえずウミガメのスープを仕込もう。』

